

公衆衛生看護管理論 I フィリピン研修報告

米増直美¹⁾, 丸谷美紀¹⁾, 兒玉慎平¹⁾, 森隆子¹⁾, 稲留直子¹⁾

要旨 フィリピンにある WHO 西太平洋事務局, JICA フィリピン事務所の活動を実際に視察し, 海外における公衆衛生看護活動や離島・へき地における看護活動を学び, 鹿児島県の健康課題である島嶼・僻地での災害対策や感染症対策を含めた保健活動を考察すること, そして, 鹿児島大学の提携大学であるフィリピン大学看護学部の学生との交流・実習施設の見学を通じて, 英語で意見交換する力を高めることを目的に研修を行った。

JICA フィリピン事務所および WPRO において, 各機関の目的および保健関連プロジェクトの説明を受け, グローバルな視点での問題解決の意義, すなわち, 開発途上国の課題解決にむけての取り組みが日本を含む全世界の公衆衛生の向上につながることを学んだ。そして, 開発途上国の人々自身で発展していくことができるように援助をしているという説明を受け, 講義で学んだ公衆衛生看護の目的とも一致していることを確認した。

フィリピン大学においては, 看護学部全体のカリキュラムと Community Health Nursing 教育に関する説明を受けるとともに, 学内・大学病院の見学, 学生との交流・意見交換を実施した。フィリピンでは看護師等医療職者不足が問題で, 特に離島・僻地では深刻であり, 鹿児島県と共通する課題を確認した。

キーワード: 公衆衛生看護 国際交流 JICA フィリピン事務所 WPRO フィリピン大学看護学部

1. はじめに

鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻の授業科目である「公衆衛生看護管理論」は, 保健師課程の必修科目であり, 地域で暮らす人々の健康生活を支えるために, 各発達段階, 健康課題に応じた公衆衛生看護の方法を学ぶとともに, 世界の公衆衛生看護活動や離島・へき地における看護活動を学ぶことを目標にあげている。この目標に向け, 日本が所属する WHO 西太平洋事務局, JICA フィリピン事務所の活動を実際に視察し, 鹿児島県の健康課題である島嶼・僻地での災害対策や感染症対策を含めた保健活動に関する造詣を深めること, さらに, 鹿児島大学の提携大学であるフィリピン大学看護学部の学生との交流・実習施設の見学を通じて, 英語で意見交換する力を高めると共に, 相互の保健医療や教育に関する理解を深めあい, アジアの看護界のリーダーとしての基礎を築くことを目的に, 研修を計画した。

本稿では, 平成28年2月14日から2月20日の7日間にかけて行ったフィリピン研修の内容と研修での学びについて報告する。

2. 研修の事前準備

研修参加者は「公衆衛生看護学管理論」履修者の3年次学生6名と, 教員3名であった。出発前にフィリピンの人口動態や文化等の概要および研修計画にあがっていた機関について事前に調べ学習し, さらに現地にて知りたいことを明確にした。また, フィリピン大学での学生交流時に鹿児島県および保健学科看護学専攻について紹介するためのプレゼンテーションの準備を行った。学生が予習したフィリピンの概要は, 表1に示す。

¹⁾ 鹿児島大学保健学科看護学専攻地域看護・看護情報学講座
連絡先: 米増直美
鹿児島市桜ヶ丘8-35-1
Tel 099-275-6793
e-mail: yonemasu@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

表 1. 事前学習で整理したフィリピンの概要

人口：9234 万人（2010 年）
民族：マレー系が主体。他に中国系、スペイン系。
言語：80 前後の言語あり。公用語はフィリピン語と英語。
宗教：83%カソリック
地理：東南アジアに位置 福岡から飛行機で4 時間
首都：マニラ 面積：約 30 万km ² （日本の約 8 割）
大小 7,109 の島々からなる。気候は熱帯性気候。
台風、地震、火山噴火等の自然災害が多い。
2013 年 11 月 台風「ヨランダ」では死者・行方不明者 7500 人以上を生じる甚大な被害あり。
健康指標 平均寿命は 67.62 歳
乳児死亡率 25、5 歳以下の死亡率 34（出生児 1000 人対、2008 年）
妊産婦死亡率 92~163（出生 10 万対、2010 年）
マラリアの罹患率 22（人口 10 万対、2009 年）
結核の罹患率は 486（人口 10 万対、2008 年）
H I V 感染者数は 1998 年の時点で 29,000 人と推定
デング熱 1998 年に 3 万人余りの患者が発生 死亡者数は 440 人
狂犬病患者の死亡者数は年間 450 人

3. 研修の実際

研修のスケジュール概要は表 2 に示すとおりである。以下、スケジュールに沿って各研修の概略を説明する。

表 2. フィリピン研修スケジュール

日付	研修内容
2 月 14 日	鹿児島→フィリピンマニラ到着
2 月 15 日	午前：JICA フィリピン事務局 午後：フィリピン国立熱帯医学研究所 (RITM) 視察
2 月 16 日	WHO 西太平洋地域事務局 (WPRO)
2 月 17 日	フィリピン大学看護学部 General Hospital 見学 学生交流
2 月 18 日	カビデ州でフィールドワーク（フィリピン大学のプログラム）
2 月 19 日	マニラ市内フィールドワーク
2 月 20 日	フィリピンマニラ→鹿児島着

1) JICA フィリピン事務所

JICA (Japan International Cooperation Agency) は日本の政府開発援助 (ODA: Official Development Assistance) 実施機関として、開発途上国への国際協力を行っている。開発途上国への支援機関として NGO もあるが、NGO は人々の寄付金により運営がされているのに対し、ODA は日本国民の税金が資金源となっている。JICA の目指すところは、開発途上地域等の開発・復興により経済の発展と安定に貢献し、日本を含む世界の国際協力の促進並びに我が国及び国際経済社会健全な発展に資することである。JICA が取り組んでいる地球規模の様々な問題として、貧困、感染紛争、自然災害、気候変動などがある。JICA の支援メニューには、技術協力、有償資金協力、無償資金協力、市民参加協力、国際緊急援助隊、の 5 つがあり、これらのメニューを組み合わせることで支援を行っている。現在重点的に取り組まれている

こととして、運輸インフラの整備が揚げられる。マニラ市内の交通網整備の遅れによる交通渋滞が大きな問題である。さらに、マニラ湾や空港も混雑しているため、人や物資の輸送が厳しいことが、経済発展のネックとなっている。空港や港が混雑し、着陸や入港を待機している航空機や船の燃油を無駄に消費し、環境汚染も起こしている。フィリピンの運輸インフラを整備することにより、フィリピンの人々の生活を改善するだけでなく、グローバルな経済発展と資源・エネルギーの消費を削減すること、環境汚染を削減すること等、世界規模の問題解決につながることを学んだ。



写真 1 JICA フィリピン事務所にて

2) RITM (Research Institute for Tropical Medicine: 国立熱帯医学研究所)

感染症と熱帯病はフィリピンの公衆衛生の重要課題である。RITM は、感染症・熱帯病の研究を推進するため、熱帯医学研究所の設立に関する合意書が日本国政府とフィリピン国政府の間で交わされた後、1981年 JICA の無償資金協力によって施設が建てられた。当初、50床の病棟と研究棟が建てられ、その後追加の無料資金協力により、熱帯感染症研究のトレーニングセンター、結核レファレンスラボが建てられた。以後、感染症や熱帯病に関する研究を中心となっておこなう役割を担い、治療および国内の地方の医療従事者に対するトレーニングを行っている。

RITM における日本の技術協力として、東北大学がフィリピンを拠点の「新興・再興感染症共同研究センター」を RITM におき、研究を行っている。蚊を媒介するマラリア、デング熱、ジカ熱、フィラリヤや、結核、狂犬病等多岐にわたる研究をしている。日本での狂犬病の発症は、1956年以降は確認されていないが、フィリピンにおいては狂犬病での死亡者が年間300人ほどいる。日本の狂犬病予防法に類似する規制があり、予防接種は低コスト

トで受けられるのであるが、接種率は低い。

また、子どもの死因として多い肺炎対策を検討するために、「小児呼吸器感染症に関するコホート研究」も実施している。日本では死亡することがまれなこのような感染症で子供たちが死亡する原因が何なのか、その死亡率を下げるために何ができるか明らかにするために地域において、長期的な観察を行っている。

3) WHO 西太平洋事務所 (WHO Western Pacific Region)

WPRO は WHO 世界保健機構の地域事務所として、西太平洋地域の37国・地域を管轄している。WHO の目的である「すべての人々が可能な最高の健康水準に到達すること」を目的として、西太平洋におけるあらゆる公衆衛生問題の対応を行っている。近年の課題は、感染症、非感染性疾患（精神疾患、生活習慣病、タバコ等）、ヘルスケアシステム、健康危機管理である。

DSE (Division of Health Security and Emergencies) の朝の定例会議を見学した。これは毎朝開催されている30分のミーティングで、管轄の37地域で今現在起っている災害や感染症等健康危機に関わる情報を、地域毎にスライド1～2枚にまとめ、各地域担当者から報告するものである。管轄地域の最新情報を常に収集し、全スタッフが情報を共有することにより、緊急事態に備えていた。実際に大規模災害が起こったときには本部となる部屋での会議を見学したことにより、IT 通信機器を駆使し、アジア全域からの情報収集および情報発信をしている様子を体感でき、アジア地域全体の管理・指揮に関わる WPRO の役割を学んだ。

さらに、Reproductive Health と母子保健について講義を受けた。対応には文化、宗教の違いを理解したうえで、その地域に応じた対応方法を検討し、制度を整えていく必要性を学んだ。例えば、中絶に対する考えは国によって多様で、胎児を人として考えるかは各国の法律によって異なる。フィリピンでは中絶に対する考えが最も厳しく、母胎の健康上の理由でのみ許されている。しかし、法律でコントロールしても中絶の数は変わらず、結局は、安全ではない中絶方法による産婦の死亡も多い。そこで避妊をすることも重要になり、避妊方法としては、避妊用インプラントが用いられることが多い。望んだ妊娠だった場合、産前健診を受け母子の健康管理がされているが、過去20年間出産で死亡する妊婦の数は変わらない。WHO は専門家による医療施設での出産を推奨しているが、実際には専門家による介助がないまま出産する事例も多く、出血や感染症等の出産時の問題による妊産婦死亡が多い。



写真2 WPROにて

妊産婦死亡の問題にも影響してくることであるが、島や僻地等では医療従事者の不足や医療機関未整備のところも多く、医師、看護師等の人材をどのように確保するかがフィリピンの大きな課題である。島や僻地で働くことを条件に奨学金を出しているが、海外へ流出する医療職も多く、なかなか定着には至らない。

4) フィリピン大学

フィリピン大学においては、看護学部全体の概要説明と学内・大学病院の見学、学生との交流・意見交換を実施した。翌日、地域看護教育の説明を受けると共に、4年生が実習している郊外へ出向き、実習の様子を見学した。

(1) 看護学部について

2013年以降フィリピンの基礎教育課程が変更になり、大学入学までに7年間の初等教育 (Elementary School) と5年間の中等教育 (現地では High School という) の合計12年となったが、それまでは6年間の Elementary School と4年間の High School の合計10年間で、16歳で基礎教育修了であった。現在の大学生は旧教育課程であるため、大学1年生が17歳で、20歳で卒業し、看護師となる。フィリピン大学看護学部の歴史は長く、1948年に学士課程、1955年に修士課程、1979年に博士課程が設立された。これまでの看護師国家試験合格率は100%で、さらに毎年何人ものが国家試験上位成績トップ10に入っている。

フィリピン大学の看護教育の説明を受け、卒業後に即実践力となりうる人材育成を目指しているということを感じた。実習においては、手術時の器械出しも体験し、正常分娩の直接介助は男子学生も5事例は体験することであった。また、病院見学の際、小児病棟を案内してくれたのは病棟全体を管理する実習中の4年次学生で、自立し自信を持って病棟について説明をしていた。



写真3 フィリピン大学

(2) 大学病院の見学

病院の看護体制は、50床の病棟に4名の看護師が配置されている状況で、ここでも看護師不足を実感した。一年中暑い国であるが、一般病棟には空調はなく、待合用の椅子の数も少ないので、外の中庭や段ボール紙の上に寝たり座ったりして待っておられる患者さんが多くみられた。看護師数が少ないため、入院患者には家族が付き添う必要があるとのことであった。



写真4 フィリピン大学病院見学

(2) 学生交流

学生との交流・意見交換の場では、鹿児島大学看護学専攻のカリキュラムの説明、鹿児島の文化等を学生が英語でプレゼンテーションし、学生同士の交流が活発に行われた。本学の授業科目である「島嶼看護学」(Islands Nursing)に大変興味を持たれていた。日本に行ったことがあるフィリピンの学生もあり、また日本のアイドルやアニメが人気で、日本語の歌の披露が行われた。



写真5 鹿児島大学の紹介プレゼンテーション



写真6 学生交流の様子

(3) 地域看護教育と実習

地域看護の実習は、2年次から始まり、妊婦や慢性疾患患者等の個別ケアと家族全体を捉えたケアについてマニラ市内の保健センターを拠点に実習する。そして3年次には地域全体を捉えた看護の展開について学ぶ。マニラ市内の小さな地域を対象に、地域診断、家庭訪問、何が健康に影響しているのかを捉えるためのインタビュー等を行い、その地区に起こっている健康に関わる事象の大きな絵を描き、地域の健康問題を整理し、問題解決のための看護援助を計画する。4年生では、マニラ市内から離れた地方に出向き、8週間そこで生活しながら、地域看護実習を行う。

今回の研修では、マニラ市内から約70kmにあるカピテ州のアルフォンソ町とメンデス町を訪れ、4年生の地域看護実習を見学した。学生2~3名が一つの小地区(バランガイ)を受け持ち、担当バランガイの全戸家庭訪問によりその地域のヘルスニーズを明らかにし、課題解決のための対策を検討し、実践するという活動を、医学部生、歯学部生、ソーシャルワーカー、バランガイヘルスワーカー等とともに実践している。各バランガイの人口規模は差があるが、多いところは約300人とのことで、そこは3名の看護学生が担当していた。学生は担当バランガイの家庭にホームステイし、週末はマニラ市等の自



写真7 メンデスの保健センター

宅に帰る生活が8週間続く。全戸訪問では、家族員全員の健康状態の把握はもちろんのこと、生活環境の把握も細かく、例えば水道の有無、溜め水には蓋が有るかどうかがや、冷蔵庫の中身等も把握していた。さらに、各学生が5世帯の継続援助事例を受け持ち、継続看護も実施している。各バラングイでの活動計画に基づいて実施されている家庭訪問や健康教育等の実習に参加した。ここでも学生から担当しているバラングイについて説明を受け、案内をしていただいた。学生が地域の担当保健師のように自立して実践活動に臨んでいる姿が印象的であった。バラングイの集会所において、学生だけで健康教育を担当し、一人の学生が対象者へ現地語で健康教育をしているところを、もう一人の学生が我々に英語で通訳してくれた。



写真8 バラングイの集会所 健康教育の会場

4. 研修による学び

研修後の学生による報告書から、下記の学びを確認した。

1) グローバルな視点での問題解決の意義

学生は、開発途上国の課題解決にむけての取り組みが、日本を含む全世界の発展、繁栄、そして公衆衛生の向上につながることを学んでいた。例えば、感染症の問題で考えると、地球上のどこかで発症した新型感染症は、瞬く間に世界中に広がるため、世界への蔓延を防ぐためには早期に食い止めるための情報共有と治療研究をすすめていくことが必要である。また、フィリピンでは市内の交通渋滞により、人々の通勤時間も長時間になり日常生活に負担をもたらす、経済的な発展を妨げている。車の問題だけでなく、空港や港の混雑は輸出入を制限させることになり、日本および世界の人々の生活や経済発展にも影響する。そこでODAによる開発途上国支援をおこなっているのであるが、それは開発途上国のためだけではなく、日本および世界の繁栄につながるのである。また、その支援の方法は、開発途上国の人々自身で発展していくことができるように援助をしているとの説明を受け、講義で学んだ公衆衛生看護の目的とも一致していることを確認していた。そして、その地域の文化や人々の考え方に沿い、地域に合った支援を提供することが大切だと学んでいた。

2) 現地での体験から実感できたこと

研修先での説明を受けることだけでなく、海外での生活を体験したり、見たりすることで、日本との違いを実感していた。例えば、トイレには便座がなかったり、犬が繋がれずに歩いたり、水道の無い家もある、というような環境に身を置くことで、日本では普通、当たり前、と思っていたも、世界から見ればそうではないことを理解していた。海外の文化や人々の生活を目の当たりにすることで、その地域の人々の生活様式や考え方に沿って援助していくことの意味を深く考えることができていた。そして、公衆衛生の向上には、経済の発展、法や規制を整えることなど、広く社会が発展していくことが必要であることがわかり、日本の公衆衛生発展の歴史をよく学び、社会全体の問題を捉えること、そして日本だけで考えるのではなく、グローバルな視点を持って考えることの必要性について考えを深めることができていた。

5. 今後の課題

1) プライマリーレベルでの島嶼・僻地での保健活動について

研修の目的として、鹿児島県の健康課題である島嶼・僻地での災害対策および感染症対策への保健活動の考察を深めることを挙げていた。災害対策では、大規模災害発生時に中枢機関となり情報収集とマネージメントを行うWHOの役割・機能を学び、感染症対策としては

RITMにおいて感染症予防のための研究活動について学ぶことができたが、プライマリーレベルでの保健活動、すなわち、災害や感染症が起こっている現場での対住民に対する直接的な看護職による支援の実際については研修することが出来なかった。今後、さらにいろいろな地域での健康危機発生時の多様な看護活動の実際を学び、考察を深めていく必要がある。

2) 国際コミュニケーション力の向上

すべての学生が自分自身の学習課題として、英語力の向上を挙げていた。今回、英語で説明を受けることも多かったが、学生にとっては理解が難しかったようである。また、「言いたいことが言えない」というもどかしさも経験したことで、語学力を向上し、相手の言いたいことや気持ちを理解し、自分の意見も言えるようになりたいという感想を述べていた。語学は常日頃から使い、慣れることが必要である。学部教育の中で、もっとコミュニケーションをとるための英語力をつける方法を検討する必要がある。

謝辞

本研修を実施するにあたり、フィリピンで私たちを受け入れて下さった、JICA フィリピン事務所の皆様、WPRO の皆様、フィリピン大学看護学部の先生方、学生の皆様に深く感謝する。また、本研修は鹿児島大学学生海外研修プログラムにより実施されたものである。このような機会を与えられたことに感謝する。

The Report of Studying of “Public Health Nursing Management I” at the Philippines

Naomi Yonemasu Acdan¹⁾, Miki Marutani¹⁾, Shinpei Kodama¹⁾, Ryuko Mori¹⁾, Naoko Inadome¹⁾

1) Community Health Nursing and Nursing Informatics, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University

Address correspondence to : Naomi Yonemasu Acdan
3-28 Shimotatsuo, Kagoshima 892-0852, Japan
TEL : 099-275-6793
E-mail: yonemasu@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

This is a report of the study trip of nursing students to the Philippines. We visited the Japan International Cooperation Agency(JICA)in the Philippines office and World Health Organization Western Pacific Region (WPRO). The purpose was to learn about the public health nursing practices abroad and nursing practices in islands and rural remote areas and to consider the public health issues in Kagoshima prefecture including disaster management and infectious disease measures in islands and remote areas. In addition, we visited Philippine University, which is an affiliated school with Kagoshima University, to interact with nursing students and to improve the discussion in English. We learned at JICA Philippine and WPRO by the lectures of the mission of these organizations and health projects, and we learned the significance of problem solving from a global perspective and the efforts towards solving the problems of developing countries and to improve the public health in the world including Japan. And they are helping people in the developing countries to improve themselves, and we confirmed that it is the same purpose of public health nursing which we learned in the lecture. At the University of the Philippines, we received an explanation about the curriculum of the nursing department and about the education of community health nursing, and visited the university hospital. After that we interacted with students and exchanged opinions. In the Philippines, lack of medical professionals such as nurses is a problem, especially in remote islands and remote areas, it is a serious problem, and we confirmed the issues common to Kagoshima prefecture.

Key words: Public Health Nursing, International Exchanges, JICA Philippines’ Office, WPRO, School of Nursing Philippines University